

浦川宜也&東京クラシックプレイヤーズ

ヴァイオリニストの浦川宜也さんと教え子たちによって編成された東京クラシックプレイヤーズのコンサートは、毎年展開されている。浦川さんが狙う音楽的意図を、本誌では、昨年よりずっと追っている。

大きな特徴として弦楽合奏曲だけでなく、カルテットとして作曲されたものを弦楽合奏で演奏することがあげられる。ベートーヴェンのカルテットが、弦楽合奏で演奏されることによって、あらたな世界が築かれるのだ。

そして、楽曲のデフォルメという概念も浦川さんに語っていただいた（2009年6月号）。

今春に行なわれたコンサートでは、シューベルト／ヴァイオリンと弦楽のためのロンド・イ長調 D.438、レスピーギ／リュートのための古風な舞曲とアリア 第3組曲 P.172、ベートーヴェン／弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 Op.131 が演奏された。

昨年のインタビューに引き続き、今回のコンサートも振り返っていただいた。

デフォルメ以前の工夫

—— 昨年の6月号のインタビューで、浦川さんが、東京クラシックプレイヤーズにおいて実現されようとしている音楽、そしてそのためのデフォルメに大変感銘を受けました。

「今回は、最初にレスピーギの『リュートのための古風な舞曲とアリア』を演奏しました。これは基本として、透明な音で演奏しなくてはいけない楽曲なので、ベートーヴェンとは違った音色が要求されます。

ただ元々、透明に響くように曲が書かれていますので、あまり重厚にならないように気をつけました。

そして新たな工夫として、場所によって、アルコのところでも、プルトの半分の方にピッチカートをお願いしたりしました。例えば、セカンド・ヴァイオリンが動くところで、プルトの外側の人が譜面のままのアルコで弾き、内側の人がピッチカートで演奏するのです。

その理由は、なるべくすっきりした響きを作りたいから、ということです。幸いCDにも綺麗に収録されていると思います。」

—— これも『デフォルメ』のひとつですか？

「デフォルメとまでは行かないかもしれませんが。これは単に響きを整えるということですね。あのストコフスキーも、響きのために、いろいろなことを試みていましたよね。

例えば、クレッシェンドさせるときに、ヴァイオリンの後ろの方のプルトから弾かせて、だんだん前の方のプルトに弾かせる、ということをしました。

ふつう音量を少なくする時には前の方のプルトに弾かせるというのがだいたいのやり方ですが、ストコフスキーは逆に後ろの方に弾かせたわけですね。

ストコフスキーがベルリン・フィルを振ったコンサートを聴いたことがあるのですが、この時は本当にびっくりしました。やはり、あのディズニーの『ファンタジア』という映画に関わっただけあって、凄い工夫だなあと思いました。」

古典とロマンが同居しているシューベルト

シューベルトは演奏が難しいと言われますけれども、技術的に難しいだけではなくて、シューベルトの音楽の内容をしっかりと把握しなくてはいけないですね。

シューベルトの気持というのは、勿論ロマン派だと思うんです。でも、それが古典的な箱の中に入っているといいですか、古典的な枠組みの中で表現されているんですね。ですから非常に古典的な部分とロマン的な部分とが同居しているんですね。」

—— シューベルトは音楽史的にはロマン派に括られますが、古典的な香りがあるわけなのですね。

「ええ、そうですね。ですから彼をどういうふうに捉えるのかということは重要です。また、曲によっても比重がどちらに傾くのか、ということもあります。ですからシューベルトはある程度柔軟に対応せざるをえないと思います。

それから、ベートーヴェンやモーツァルトでさえも再現部になった時に一部カットしたり変更したりしていますよね。そういうことはシューベルトの場合はほとんどないですよ。再現部は本当にそのまま再現。」

—— その辺で曲が長くなるんですね。

「そうですね。ですからそれを楽しむこともできるし、逆にうるさく感じる場合もあると思います。そういう点ではモーツァルトやベートーヴェンの方がもっと聴き手のことを考えてつくったように私は思えます。

頑なに自分の思ったことを貫く、それは彼の作曲方針のひとつだと思います。意外とベートーヴェン以上に頑固な部分があったのかもしれませんが。聴いている人に気に入りたいということよりも、自分の基本方針の方が大事だったのじゃないかと想像します。

カデンツァもトゥッティで

—— ベートーヴェンのカルテットを弦楽合奏にするとき、コントラバスというのは、どのような扱いになるのですか？

「ベートーヴェンはコントラバスのパートは書いてない訳ですから、どこをコントラバスに弾いてもらうか、というのは重要なことです。

やはり、純粹にカルテットの的に響いた方がいいと思われるところは、オクターヴ下のコントラバスはない方がいいですし、響きが重厚になるところは逆に弾いてもらって、全体の響きを引き締めてもらう、という役割を担っていただきました。

ベートーヴェンとは本当に長く関わっていますが、それでも弦楽合奏をすることによって、さらに作品のことがよく分かるようになってきました。

それから私は元々指揮者ではありませんから、合わせるためにしっかり棒を振らなければいけないです。その棒の振り方、工夫というものが、やはりどんどん進化してくると思います。

4人で演奏すれば、暗黙の了解ですむことも、団体になりますとそうはいかないですね。特に今回の作品 131 の場合、ファースト・ヴァイオリンのカデンツァを皆で弾くわけです。その部分だけソロでやるわけではないのですね。ですから例えば、ソロで弾く時よりは少しテンポを落とす、あるいは規則的に弾く、でも規則的に弾いただけでは面白くなるので、テンポを多少動かしたり……そういうことを練習の時から、説明しました。

バーンスタインがウィーン・フィルを振っている映像があるんです。私がヨーロッパにいた頃に見たのですが、ウィーン・フィルと言えどもやはりヴァイオリンのカデンツァは、本当にバラバラになってしまうんです。ですから、そういうふうにならないように注意しながらやりました。団員の皆さんは、非常に集中してくれて、密度の濃い演奏ができたと思います。

今後のこのシリーズの予定として、来年はベートーヴェンの作品 132 を予定しています。」

String Sep. 2010 より